

『十訓抄』における「見る」ということ ——「冥—顕」像との関連から——

川 本 豊

はしがき

小稿は、〈奥〉をキーワードとした日本人の「住まい感覚」の研究の一環として位置づけられる。

これまでのところ、〈奥〉は、自らの立ち位置からしか見ることができず、求めようとしても〈奥〉は、するりとそのまま奥（向こう）へと移ることになり、〈奥〉への到達は永遠の願望にならざるをえないことが検証できた。⁽¹⁾つまり〈奥〉は、「もの」として見えることはないが、「こと」としては感受しうるというパラドックスを内包している。しかしこれを「見える」の一種としてとらえることも可能であろう。

ところで「冥—顕」世界像について若干説明をしておきたい。「顕界」とは明るい世界つまり我々の生きている日常・現実の世界であり、それを超えた非日常・非現実の世界を「冥界」と呼び、字義通り暗い世界とする。平易には「この世」と「あの世」ともいえよう。池見澄隆氏は、顕界の人々にとつ

て、冥界からの一方的被透視性がその特徴であるとし、「みえない—みられる」という齟齬性を基本構造とされる。⁽²⁾

『十訓抄』（建長四年・編者不詳）の成立した中世とは、この「冥界」のイメージが最大限に膨らんだ時代なのである。

さて、「見る」とは、目によって物の外見・内容などを知ることである。この「見る」あるいは「見える」はともに、今日でも日常的に使用している言葉であり、その生理的行為として意味するところはさほど大きくは変わっていない。まず「見る」（「見える」）の語義を概観しておく。⁽³⁾

- ① 目によって物の外見、内容などを知ることであり、また、それをもとにして考えたり判断したりすること。
- ② 物事を経験したり、物事や人に対して身をもって働きかけたりすること。
- ③ また「見える」は、「見る」の自発の形とされ、受身・可能の意にも用いられる。

ここでは見られる側である「対象」と、見る側の「主体」

との関係について確認をしておきたい。①においては生理的な意味として光と視力に依存した肉眼とも位置づけられ、見るためには対象と主体との間には一定の距離が設定されなければならぬ。②ではいわば心眼ともとらえられ、そこでは対象と主体との距離は問題にならない、あるいは、なくなつていても可能であり、距離という問題を超越していると考えられる。そして③になると、対象は同じように存在するのであるが、主体―性が希薄になつているのである。

一 「目―見る」(見える) について

「目―見る」という関係性は、古代から現代まで基本的に変わっていない。これは『十訓抄』においてもうかがえる。

まず、書写山の性空上人が夢告によつて、神崎の遊女の女主人を見る場面をとりあげる。

〔三ノ十五〕感涙おさへがたくして、眼を開きて見れば、またものごとく、女人の姿となりて、周防室積の詞を出す。眼を閉づる時は、また菩薩の形と現じて、法門を演べ給ふ。(二四一頁)

眼を開けた時は(現実の)女人として見えているのであるが、いったん眼を閉じれば菩薩の姿として現れると書かれており、いわゆる権者の化作と位置づけている。開眼時には、日常的な肉眼視として対象を見ることになるが、閉眼時にはこ

『十訓抄』における「見る」ということ(川本)

ちらからの心眼に對して、冥衆(対象)が見ることを許諾したともとらえられよう。上人とされ、いわば俗人を超越した人が見る、開眼―顯界／閉眼―冥界という関係に注目しておく。次いで視覚と全身的体験の類話として、比叡山の西塔に住む僧に助けられた天狗の報恩譚を取り上げる。

〔二ノ七〕「ここにて目をふさぎて居給へ。仏の説法の御声の聞えむ時、目をばあげ給へ。ただし、あなかしこ、たふとしとおぼすな。信だにおこし給はば、おのれがため悪しからむ」といひて、山の峰の方へ登りぬ。

とばかりして、法の御声聞ゆれば、目を見あげたるに、山は靈山となり、地は紺瑠璃となりて、木は七重宝樹となりて、釈迦如来、獅子座の上におはします。(三九〇頁)

ここでも目(眼)の開／閉と、見ることとの関係性が書かれている。説法の声が聞えてきたので、天狗の言う通りに目を開けてみると、そこはまさしく靈鷲山であつた。ただしここでの眼を開けるとは、生理的なそれとは異なり、法の御声をきっかけにして心眼に移つたと解釈しうる。つまり開眼しつつもさきの語義にあつた②の意味に移つたのである。

この現象は、限定された条件下のことではあるが、開眼―冥界という新たな関係が生じていることがみてとれる。ここにおいて「目―見る」関係のダイナミズムが指摘できよう。

『十訓抄』における「見る」ということ（川本）

二 「良秀」「よじり不動」説話について

次に「良秀」「よじり不動」について検討を加える。

〔六ノ三十五〕 絵仏師良秀といふ僧ありけり。(中略) 火、はやわが家に移りて、煙、炎、くゆりけるを見て、おほかたさりげなげにてながめければ、知音どもとぶらひけれども、さわがざりけり。「いかに」と見れば、むかへに立ちて、家の焼くるを見て、うちうなづき、うちうなづきして、時時笑ひて、「あはれ、しつる所得かな。年ごろわろく書きけるものかな」といふ時、とぶらひ来たる者ども、「こはいかに。かくてはあさましきことかな。ものつき給へるか」といへば、「何条、ものつすべきぞ。年ごろ不動尊の火炎を悪しく書きけるなり。はや、見取りたり。これこそは所得よ。この道を立てて、世にあらむには、仏をだによく書き奉らば、百千の家も出で来たりなむずるものを。我党こそさせる能をもおはせねば、物を惜しみ給へ」といひて、あざわらひて立てりけり。そののちにや、良秀が「よぢり不動」とて、人々めであへりけり。(二七一〜二七二頁)

氣遣つて駆けつけてきた知人友人から見れば、当の良秀が見つめているのは、彼の家が燃えるその炎である。しかし、そこで良秀自身は何を見ていたのかということになろう。

自分の家が燃えている火事場とはまさしく尋常ではない場所(時―空)として、この世における一種の異界としてとらえうる。そこにおいて半ば笑うようにその火を見つめる良秀の

行状は、「ものつき給へるか」と、周りからすれば、もはや気がふれたとしか受取れないのである。しかし本人にとっては、「見る」とはまさしく燃えさかる炎の直中に自らが没入し、その只中で不動尊の火炎(本質といってもよいであろう)に炙られていたのである。さらにいえば、自らが燃えていたと考えてもよいであろう。それ故に「はや、見取りたり」と一氣呵成の表現になったものとしてとらえたい。

見つめる対象は、すでに「異界」としてとらえられ、顕界での常識を超えたところにある。眼を見開いた状態ではあるが、それはもはや肉眼を超えたもの、つまり心眼としてとらえうる。さらには、火炎の本質を凝視する彼のまなざしはそれをも超えた「第三の眼」としても考えられる。

再度、冥顕―世界像の観点からみておきたい。良秀が対峙する自宅の燃え盛る火炎(異界)と自身との関係は、火炎(異界)からのまなざしをまさしく全身で受けとめていることが読み取れる。ここにも「見えない―みられる」という基本図式は生きている。しかしそれが「見える―みられる」になったとき、絵仏師良秀もまた「異界」の人となったといえるのではないか。さきにも注目した「目―見る」関係の、固定的ではないダイナミックな変動があらためて見てとれよう。この基本図式の変動の証左として、良秀が吐露する言葉「見取りたり」を解釈したのである。

むすび

『十訓抄』の説話を素材に、目（眼）と「見る」との関係について次のことが確認できた。光と視力を前提とする現代の知見からすれば自明のことであろうが、しかし、そこにとどまることなくさらに大きな広がりとして「目―見る」の関係が語られているのである。いわば、見える「もの」と、見える「こと」とが分離される以前の、始原的〈見える〉が表出されていると考えられるのである。

夢告は、当時の人々にとつては、ひとつの現実であり、まさしく事実としてとらえていたと受取れる。そこでの「見る」は単なる見えるもののみではなく、見えることとしてもとらえるであろう。「見る」の語義からは、生理的な肉眼視、全身的体験としての心眼視、そしてさらには第三の眼としての「見る」も予感できた。それは、当時の人々がもっていたであろう「冥―顕」「世界イメージと無縁ではない。良秀の「見―取る」という言葉からも「見えない―みられる」というまなざしの非対称性という基本図式とともに、異界化現象としてとらえる「見える―みられる」への移行というダイナミズムが検証できたのではないか。

多田一臣氏の、古代における「対象が「見える」のは、こちらの「見る」意志を対象が受け入れたからにはかならない。」

『十訓抄』における「見る」ということ（川本）

（二八頁）という指摘は、ここでいう「もの」と「こと」、つまり対象と主体との近接・複合・合致につながっていくのではないだろうか。そこに現れる向こう側の世界像（冥界・冥衆）に、中世的な時代の特徴がうかがえるのである。

1 拙稿「〈奥〉の精神史的考察——『讃岐典侍日記』（下巻）における時間・空間——」『佛教学大学院紀要』第四〇号、二〇一二年。
2 池見澄隆編『冥顕論——日本人の精神史——』法蔵館、二〇一二年。「顕界」および「冥界」という言葉の使用については右記池見澄隆「序にかえて」に拠っている。

3 『日本国語大辞典 第二版』小学館。

4 「異界」についても前掲注2に拠り、冥界と顕界とのオーバーラップした部位とし、〈奥〉を例とする、より具体的な顕界における冥界へのチャンネルとしてとらえている。

〈参考文献〉

池見澄隆『慚愧の精神史』（思文閣出版、二〇〇四年）
中西進『万葉集原論 柿本人麻呂』（講談社、一九九五年）
多田一臣『古代文学の世界像』（岩波書店、二〇一三年）

本文の引用は次によっている。（傍線は、引用者による。）

浅見和彦校注・訳『十訓抄』新編日本古典文学全集、小学館

〈キーワード〉 奥、冥顕論、異界、見る、『十訓抄』

（佛教学大学院）